



論文誌編集委員会

ヒューマンインタフェース学会

論文誌編集委員会委員長（担当理事）

加藤 博一

ご存じのようにヒューマンインタフェース学会は、論文誌を年4回発行しております。最近、1号当たり約20編の論文が掲載されており、採択率は50%前後となっております。論文誌編集委員会の主な作業は、投稿された論文を査読することで、それらが掲載に値するかどうかを判断することです。編集委員会にとって、この採否判定には常に悩ましい問題がつきまといまいます。それは、どのような基準で論文の採否を決定するかです。もちろん良い論文を採択するということなのですが、何が良い論文なのかということです。ここでは、それに関して私の考えを述べさせていただこうと思います。

そもそも論文誌のような学術誌の目的は、研究成果を公知することにあります。それによって研究成果を社会に還元するところにあると思います。しかし、研究が進むにつれ、取り扱う問題もどんどん難易度を増し、なかなか簡単に社会に出て行く研究成果を得ることはできません。だから、チームとしての取り組みが重要だと思います。私はHI学会の会員全員がHIという研究チームの一員だと考えています。誰かが何らかの研究成果を上げた。でも、それは不完全かも知れない。それでもよいと思います。学会のまた誰かがそれを引き継いで研究し、次のステップの成果を上げる。この研究のバトンタッチが重要で、それを実現させる仕組みが学会であり、論文というのはバトンやたすきの役目を担っているのだと思います。このたすきがうまくつながるようにすることが、最終的に誰かが偉大な成果をあげるためのルールとなり、また、この研究分野を活性化し、我々の取り組みが社会から認められることにつながるのだと思います。それがHI学会というチームを構成する意義だと思います。

このように考えると、論文誌に掲載すべき良い論文とは何かが見えてきます。それは完成された研究成果を含む論文に限りません。たとえ解決されていない多少の問題を含んでいても、結果の信頼性・妥当性が完全には示されていなくても、その内容に関して、誰かがたすきを引き継いで次の段階の研究を遂行したくなる十分に興味深い問題設定と、明確な問題点の切り分け（何が解決し、何が課題として残っているか）が明瞭に記述されている論文です。実際に不採録になる論文を見ていると、魅力的なアイデアを含んでいるものの、その評価において実験で示されたこと以上のことを結論として主張してしまったもの、得られた結果はある特定の条件のもとでも十分に興味深いにも関わらず、問題設定において実際に取り組んでいる問題領域以上の範囲を対象にしていると主張しているものが、よく見られます。論文を執筆する立場からは、研究成果をより価値の高いものに見せようと表現を工夫したくなるのは理解できますが、実際に考えたり、実験して得られた知見以上のことを事実のように追加してはいけません。例えば、実施した評価実験において信頼性の高い結論を導くことができなかつた場合に、それを明確な結論が得られたように断定的に説明するのはよくありません。論文には信頼性が要求されます。しかし、それは実験結果の信頼性を直接的には意味しません。論文に記載されている内容の信頼性が重要です。つまり、信頼性が高くない実験結果しか得られなかつた場合は、その結果は信頼性が高くない結果であるという事実を説明してください。それが、論文の内容としての信頼性を高めます。無理に信頼性の高い結果が得られたと表現することは、論文の内容としての信頼性を下げます。

このような良い論文とは何かといった考えは、編集委員会委員や査読者の中で認識を一致させ、どの論文に対しても公平な判断をしなければいけません。編集委員会の委員も毎年交代しますし、査読者も世代を交代していく必要があります。その中で、このような思いを継承できるように、編集委員会もチームワークを大切に活動したいと思います。